

現地に行くときに知っておいてほしいこと

① ボランティアに行きたい！

現地で支援できること、役に立つことはいくらでもあります。でも、かえって迷惑になってしまうことはもっとたくさんあります。そうならないために、どうすればいいでしょう。

まず、そもそも「間違った情報」に乗らないことがとても重要です。しっかりとした活動実績のあるNPO法人やボランティア団体は、たいてい公式ホームページを開いていますので、そういったものにアクセスして「公式の情報」をつかむことが一番です。48 ページで紹介している「ボランティアインフォ」など、さまざまなボランティア団体が発している情報を一覧できるポータルサイトを活用するのもいいでしょう。

注意しなければいけないのは、ツイッターやフェイスブックといったSNSでたびたび目にする「〇〇村で人手が足りません!」「すぐに××を送ってください!」といった情報です。「それは大変だ!」とその情報の真偽を確認せずに現地に駆けつけてしまったり、あるいはリツイートやシェアで「拡散」したりしてしまうと、それが誤った情報だったときに被災地に迷惑をかけることもありえますし、貴重な人手や物資が浪費されてしまうかもしれません。

実際に、東日本大震災ではSNSの普及も手伝い、数々の「支援呼びかけデマ」が拡散されてしまいました。「偽」の情報が踊らされて適材適所の支援が行われないと、それこそ人命に関わります。それが信頼できる情報かどうか、慎重に調べる必要があります。

一方で東日本大震災では、「軽い気持ちでボランティアに行くのは控えよう、と言いつぎたのでは?」という反省も指摘されています。手さぐりをしながらも、自己管理し、現地ニーズとつながろうとする動きは大事です。いざというとき、自信を持ってすぐ行ける人を増やすためにも、支援訓練が重要なのです。

現地に行くときに知っておいてほしいこと

② 花形だけがボランティアじゃない

人数のばらつきは「時期」だけでなく、「仕事の種類」でも出てしまうことがあります。たとえば炊き出し、がれき撤去、行方不明者の搜索など、私たちが「災害ボランティア」としてイメージしやすい仕事は、実は希望者の多い支援でもあります。でも状況によりこうした仕事に受け入れ可能な人数が限られたり、もっと目立たない仕事こそが必要とされることは少なくありません。

「やりがい」を求めてボランティア団体に参加した人が、炊き出しなどではなく、もっと目立たない仕事を割り振られて怒ってしまった、そんな話もしばしば耳にします。

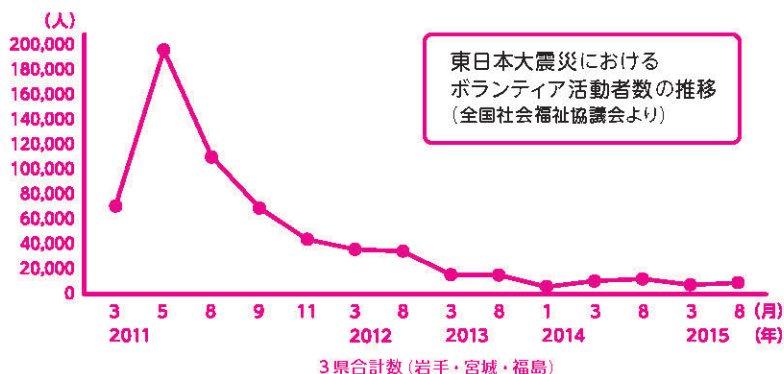
しかし、支援物資の倉庫では適切に在庫管理をする人が必要です。NPOの現地事務所で電話番をしてくれる人がいれば、作業に当たっている人はどんなに心強いでしょう。データを整理したり経理をしてくれる人はどんな場所でも貴重な戦力です。仮設住宅で生活している高齢者にとって、必要なのは相談ではなくただの世間話かも知れません。時期によっては現地スタッフ以上に、離れた場所でチャリティイベントを行ったり物資を取りまとめる人手が不足することもよくあることです。

「行きたい時期」と「やりたい支援」に偏りが出てしまうのは、ある程度は仕方のないことかも知れません。でも「じゃあ私は違うときに目立たないことをやろう」と考える人がもっと多くなれば、被災地の目立たない困り事はどんどん少なくなっていくことでしょう。

現地に行くときに知っておいてほしいこと

③ 支援のニーズはずっと続く

見落としがちなことですが、ボランティアには「はやりすたり」があります。



被災の全貌が見えてきたなかでの大型連休を迎えた2011年5月は、宮城県だけでも10万人を超えるボランティアが社協を介して現地入りしました(社協受付以外のNPOなどはこの数に含まれませんので、実際の活動者はもっと多いはずです)。また、3月11日からの2～3か月はボランティア数が増える傾向も見えてきます。

しかし、たとえば14年1月に3県で活動していたボランティアは4,000人弱。ピークだった11年5月のわずか2%です。これが復興が十分に進んだことによる「ニーズの減少」の結果であれば、それは喜ぶべきことですが、もちろんそうではありません。

災害の直後や、毎年やってくる「あの日」の前後だけでなく、継続的に被災地とのつながりを持ち支援を行うことを、個人レベルでも意識することが重要です。自分自身の体力やお金のことも考慮して、無理のない範囲で年間スケジュールを立てるなどといった工夫を考えてみましょう。

現地に行くときに知っておいてほしいこと

④ 必要な装備も変化する

これは全国社会福祉協議会が、水害発生時の支援にボランティアとして参加するときに必要な装備としてホームページに掲載しているイラストです。とても簡潔にまとまっていて、参考になります。

このイラストがわざわざ「水害ボランティア作業マニュアル」となっている意味を考えてみましょう。たとえばゴム手袋。水害の被災地での作業ですから、水のなかに腕まで入れて作業するので、軍手などはすぐに水を吸ってしまい不向きです。でも、水が引いたあとのがれき撤去などの場合は、ゴムやビニールの手袋ですぐにボロボロになってしまうかも知れません。重い物を運ぶときもグリップのついた軍手のほうがいいでしょう。また、長靴も地震や津波の被災地では、安全靴や底の厚いワークブーツなどでないと、足をケガすることもあります。

また、装備は季節や気候でも変わります。ボランティア団体などが提供している「すでに被災地に行った人からの情報」はこうした場合にとても大事です。このイラストのような情報に、被災地の状況を加味して必要なものとそうでないもの（不要なものは作業の重荷にもなってしまいます）をしっかりとチェックしましょう。

ボランティアは「自己完結」が基本です。自分の安全や健康は、自分自身で守らなければならないことを肝に銘じてください。

また、現地ボランティアに参加するときは、家族や勤め先にスケジュールと連絡先をしっかりと伝えておきましょう。万が一のときにトラブルを小さくしておくための備えも重要なのです。

ボランティア
作業
マニュアル



廃棄するものでも、家族にとっては大切な思い出のつまった物ばかりです。取り扱いには十分配慮しましょう。

被災された方の気持ちやベースにあわせよう／お話をたっぷり聞こう／真剣さと笑顔を織り交せて／塩分と休憩はしっかりとろう



道具用途一覽



全国社会福祉協議会HPより